

はやっぱり40年前後の市内の教育情勢が変わったということですね。それから、39年の答辞の衝撃というものがあってはないかと思います。その次は、学園紛争、これはどの学校にもあると思います。その後の最大級の大きな問題で、確かにそれによって学校側も、私個人も含めて先生方も、非常なプラスになる面もあったことは事実ですが、市内の小・中の足腰が弱くなったということは事実ですね。

ですけれども、私が辞めましてから今度は一市民としていろいろ聞いてますと、(まあ、一つは塾にやろうというふうに、家庭や生徒の意識が変わったためもあるのだが)生徒が非常におとなしくてやりやすい学校だというような評価がなされている。教育というものは、ながく、しんどいものがあるから実際は、僕は、そうじゃないと思うんですが……しかし、昔も今も、生徒が生き生きとして通っているということを喜んでいる親が、実際多いことは事実です。

校風の確立というのは、やはり文化と同じで、意識して作るものじゃなく、皆やってるうちに自然に一つのもので出来ていく、そういうふうに思うんですけどね。

曾谷 その頃、「そごう」の絵画展でたまたま先生とお会いしたことがございましたが、先生のお顔色が悪く、お疲れのご様子で、ほんとにお気の毒にと思って拝見したことがありました。大変だったんだと思います。

福山 まあ大変な時代でしたね。私自身も兵庫高校在職中体験したんですけど。

### 校史の難しさ

奥田 それから、もう一つ、どの大学も「年史」に関してはここ20年間の記述に困っている。というのは、大学紛争をどのように位置づけるかということで頭を悩ましています。ご承知のように、大学側は高校と違いもっとイデオロギーのはっきりした先生方がおられるでしょう。ですから書きようがないんです。確か立命館かどこかが、比較的上手に書いているらしいんですけども、芦屋高校の場合も、本当に書く気なら大変難しいと思うんですよ。正直に書くことが本当は歴史としては必要なんだ。それだけ

の叡智と勇気をちゃんと持ってやられたら、理想的なものが出てくると思います。

ここに居られる方々は皆体験なさっていると思いますが、一つには、学校の中だけの動きじゃなく、日本の教育や社会運動の大きな渦の中で起こったことが、学校側にとっては、その存在自体が過去の歴史を含め一時に猛烈な勢いで点検し直されたような影響を、それらの動きによって受けざるを得ない。しかも、神戸高校のように校区がしっかりしておれば、また元に戻るということもあるんだけど、芦高の場合は校区は狭いは、小中は徹底的にある影響を受けたことによって、(いいか悪いかは別ですよ、受けたことは事実ですから)それによる学力の低下は、正直言って、ある。そして、どの場合でもそうですが、一度そうなったものを元に戻すのは同じ年数では済みません。それで良くなったらまだいい方です。(良くなるというのは俗な意味で「良くなる」ね。)

だから、教育をどう考えるかという視点はきっちり持ったうえで、年史を編集しよう、或いはものを言おうとすれば、ある程度のもので出来ると思うのですが。昔も今も、芦屋は特に他の町以上に教育熱心な町ですから、こういう校区の狭い処では、教師や生徒以上に地域社会の意向がもろに出てくる場所がありました。私が市民でしかも芦高しか勤めていませんので、その辺全然ピントがはずれているかも知れませんが、津本先生やその他の先生方から見られたご意見を、私個人の勉強としてもお聞きしたいと思うんです。

司会 どうもありがとうございました。年代の分け方に少し問題があるというようなことでしたが。今度は、津本先生に生徒の学習状態、また生徒の意識の移り変わりについてお話し頂いたらと思います。奥田先生と重複する点が多くあるかと思いますが、よろしくお願いします。

## 芦高教育の移り変わり

——生徒の学習面や意識の移り変わり



津本先生

津本 奥田先生が、30年代から40年代にかけての全般的な話をされたんですが、私の話というのは大体殆んど同じ時代の話ですし、それを補足するようなことが出来れば

と思うんですが、お話ししたいと思います。

ちょうど私が来たのは昭和25年、それから10年間というもの、私個人にとっても、芦高にとっても、まあ言えば青春時代のような感じの時代だった。

その10年間の間に、27年から31年にかけて3年半、足かけ4年、結核で療養していました。それで、自分の健康を第一に考えないといけないという気持ちで、ぼつぼつ31年からやってきました。そして、8回生、15回生、18回生、21回生（昭和41年）まで担任をし、それから後は担任をせずに、学校の中のいろんな問題を会議で検討する役目を担って最後まで居たんです。

先程金坂先生も言われたように、昭和20年代の7回生までは、非常に恵まれた旧制中学時代の余韻が、ずっと続いていたと思います。8回生は新制中学、それから新制高校といういわば黎明期の道程を歩いた。そういうところで、僕は両方を体験しながら、やってきたわけですね。

芦屋高校の学区そのものが、東も西も多少問題がありますけど、阪神間の芦屋と西宮の行政上の境は、学区の境としては殆んど無かったみたいな実情でした。15回生の1年生を担任した時に、クラスの生徒の名票を1番から10番まで書いてみたら、芦屋の校区は1人しか居ません。残り9人全部、尼崎とか西宮とか伊丹です。それは極端ですけどね、そういうことがごく普通であった、そんな感じがするんです。

それから、学習状況そのものというか、その辺は特別の感じは受けていないんですけど、やはりその時期にそういう生徒が非常に増えてきたこと。一方阪神間の新設校がぼつぼつ出来る時期でした。新設校が出来ると、従来の拠点になるような学校をトップにして、新設校がその下に並んでいくというふうな形が成立していった。そういう時代でもあったと

思います。あの頃にちょうど摂丹地区の模擬試験が行われ、それが実力考査の代わりに始めました。やはり、新設校と言えど参加しないといけない。その成績が全部出てくるので新設校は大変だな、という感じがありました。その頃、抜群に芦高が良かったかということ、そんな印象は無いですね。まあまあこの程度かな、という感じでね。そういうレベルの阪神間の昔からの学校何校かが、競争のようなものはあるにしても、芦屋高校では意識的に問題になり表に出てくるようなことは無かったのではないかと、という感じがします。

そういう状態で進学状況も、はっきりした資料は覚えていませんが、その当時、国立大が現役で100名位だったのかな、それが40年代になると、前半は60~80、後半になるともう少し下がってくるようになる。今、国立大の話でしたが、最近では私立大が相対的に難しくなった。30年代だと新設高校もそう無いですから、わりあい入り易かった。それが40年代後半位から、相対的に、質的に非常に難しくなってくるという状況が出て来たんじゃないかと思えますよ。それが50年代になると、うんとその傾向が強くなった、とまあ、そういうことは言えますね。

曾谷 先だって、私の教え子の娘が、芦屋高校を受けたんですね。その時、母親が言いました。姉の方は御影高校を出たんですが、「妹の方は、神戸高校、御影高校が無理だったから、芦屋高校にしました」と。私は「そんなこと無いですよ、芦屋高校にも優秀な生徒が居りますよ」と、つい言いましたけど、そういう風なランク付けがされているんですか？

奥田 私がさっき申し上げた、喜んでる親が多いという話はね、市内の親の場合です。本山・御影では、先生が今おっしゃった通りなんです。残念ながらそれは否めないですが、この市内の、山手・精道、それに潮見が出来ましたが、その三つの公立中学校の場合は、「県芦に行きたい」というムードがあるのです。ですから、芦高へ来ることを喜んで選んで来ているんです。

曾谷 ところが、娘自身は、女姉妹三人の末っ子で個性的なんですって、だから、芦校には制服がありませんでしょ、芦屋高校はとってもいいって楽

しんで行っているけれども、親としては偏差値を気にするんだそうですよ。そういう言い方をされて少し淋しい思いをしました。

## 現在の芦屋高校

——多様化した現代の高校生

**司会** 高木先生、今の生徒達は、芦高に対してどんな気持ちを持っているのでしょうか。先生の感じておられることをお話し下さい。

**高木** そうですね……私は、大学を卒業してすぐ、昭和46年4月から芦高にお世話になってるんですが、私を県芦へ来ないかとお誘い下さったのは、先輩の伊東<sup>たけし</sup> 糾先生だったんです。46年3月末頃でしたか、私の家においでになって、「県芦に来ないか。だけでも、県芦はちょっと大変な事が起こるかも分からないから、覚悟しとけよ」と言われました。と言うのは、46年の前年ですか、12月だったと思いますが、同和問題で、当時の解放同盟からの公開質問状に対して、県芦としての姿勢を問われておりました。それが、今になって考えれば、伊東先生の話の内実ではなかったかなと思うんです。

私は当時、同和問題は何かのことかということが、も一つ勉強不足でよく解らなかつたのですが、とにかく連日夜遅くまで会議がありまして、今でも覚えているんですが、当時の後藤隆一教頭先生が、お家は垂水だったんです。で、私も住まいが垂水区舞子にありまして、よくタクシーに同乗させて頂きました。タクシーに乗るのが、ほとんど夜の11時過ぎでした。



小西先生

藤原真先生

高木正先生

## 芦高生気質

曾谷先生のお話に関連してですけど、私もその一年後に30期生の担任を初めてさせて頂いて、のち9年間、連続して学級担任をいたしました。進学で進む学校を結果的に見ますと、30期生、33期生、36期生と、次第にやや進路先が変わってきたというのは事実で、担任として認識をしっかりとっておかないといけないなと思いました。例えば、私が初めて学級担任をしました30期生などは、クラスでトップの子は京都大学へ現役で入り後に京都大学の大学院へ行って、その後、イタリアの国立のミラノ大学でしたか、文部省か外務省の給付生ということで行き、現在は京都の橘女子大学の助教授をしております。こういう生徒などは、非常に芦高生らしい生徒だと思うんです。と言いますのは、勉強はそれ程やるような雰囲気は無いんですけど、余裕がありながら実は非常に力を持っている。——ちょっと変な話ですけど、私、当時独身でしたもんですから、(笑い) 修学旅行や遠足へ行きますと、彼女は必ず、手作りのおやつを、こっそり私に (笑い) 「先生、これ手作りです、どうぞ」と言って持って来てくれたりします。そういうふうに芦高生というのは、今でもそういう伝統は残っていると思うんですが、ガリ勉じゃなくて、何かこう、ゆとりを持ちながら、しかも、都会的な洗練されたものを持っているなあ。

**曾谷** 学校教育を進学率とか偏差値だけで評価するのは抵抗を感じますけれども、今の方はどうもそのような傾向がございますね。それで、先程から、先生のお話にありましたような学校らしい特徴・良さをもっと強調していただいたら……

## クラブ活動

**高木** そうですねえ。必修クラブが出来るまでの本校のクラブ活動の参加率というのは、勿論非常に高かったのですが、あの制度が定着してからは、今では1年生は全員どこかのクラブに入ることになっており、さらに参加率が高くなりました。外部から来る方々が、よくおっしゃるのですが、「芦高は非常にクラブ活動が盛んだ」と。盛んだと言うのは、スポーツの面で言いますと、対外試合、ある